

朝鮮絵画の流れ—通信使画員の場合—

吉田宏志（京都府立大学）

1. 朝鮮時代初期（1392年～1550年頃）

同代には高麗時代に蓄積された中国絵画が多数伝えられていた他に、北京を中心として明との絵画交渉も活発に行われた。その結果、朝鮮時代初期の画壇には、次のような五種の画風が中国から伝来し、朝鮮的画風形成に影響を及ぼした。

- (1) 北宋の李成と郭熙、そして彼らの追従者たちが創立したいわゆる李・郭派画風
- (2) 南宋の画員であった馬遠と夏珪が形成した、馬・夏派を始めとする院体画風
- (3) 明代の院体画風
- (4) 浙江省出身の戴進を中心とし、明初に成立した浙派画風
- (5) 北宋の米芾、米友人父子によって創始され、高克恭等によって発展させられた米法山水画風

日本絵画との関係においては次のような問題が挙げられる。

- (1) 応永17年（1410）に奉礼使として来日した梁需を歓迎して京都の南禅寺で催された五山禅僧達の詩会を描いた「芭蕉夜雨図」の問題
- (2) 相国寺の画僧、周文が1423年に訪朝、彼の作品にみられる朝鮮画の影響の問題
- (3) 朝鮮から来日したと考えられる秀文が1424年に描いた「墨竹画冊」他、彼の作品が日本絵画に及ぼした影響の問題

2. 朝鮮時代中期（1550年頃～1700年頃）

同代には日本の2度にわたる侵略（文禄の役・慶長の役）と清国による2度の侵寇（丁卯胡乱、丙子胡乱）などの戦争が続発し、さらに党争が引き続いて、政治的には非常に不安定な時代であった。このような危機的な状況下でも絵画は発展し、特色ある朝鮮的画風を形成した。さらに注目されることは、この時代に絵を好んで、描く士人の家柄、または画業を代々うけ継ぐ画員の家柄が台頭してきたという事実である。

この時代の絵事で注目される幾つかの重要な動向は大体次のようである。

- (1) 安堅派画風を初めとした朝鮮時代初期の諸画風が継続した。

- (2) 朝鮮時代初期に姜希顔などによって受容され始めた浙派系画風が隆盛した。
- (3) 朝鮮時代初期の李巖に続いて金埴、趙涑などによって翎毛や花鳥画部門に抒情性が加味されるに至り、墨竹・墨梅・墨葡萄などにも李靈、魚夢龍、黄執中、許穆などの優れた画家が輩出した。
- (4) これらの他に中国から南宗文人画が伝来し、次第に受容され始めた。

朝鮮通信使の画員の場合

この期間に朝鮮通信使の7度に及ぶ来聘があり、随行した画員、及びその遺品を挙げると次の様になる。

- ① 慶長12年（1607） 李泓虬 遺品は未発見
- ② 元和3年（1617） 柳成業 遺品は未発見
- ③ 寛永元年（1624） 李彦弘 遺品は未発見
- ④ 寛永13年（1636） 金明国 「達磨図」「寿老図」「神仙図」「鷺図」
- ⑤ 寛永20年（1643） 金明国 「芦雁図」「舟遊図」「山水図」（团扇図）
「墨梅図」「墨竹図」など約16点
李起竜 「野馬図」（伝称作品）
- ⑥ 明暦元年（1655） 韓時覚 「布袋図」「川蟬図」など約7点
- ⑦ 天和2年（1682） 咸悌健 「墨竹図」「蘭石図」など

これらの遺品20数点を通覧して言えることは、金明国の作品に代表されるように

- (1) 画題は達磨、寿老、布袋、神仙など、いわゆる道釈人物が大半を占め、他は四君子など。
- (2) 画風は当時のソウル画壇では見られない、一種の枯淡さのある禅宗画風の減筆体が主。
- (3) 水墨だけのもの、あるいは水墨に淡彩を加えた席画が大半で、本格的な力作、及び大作は稀少である。

3. 朝鮮時代後期（1700年頃～1850年頃）

同代には、従来の性理学、礼学中心の儒教とはちがう新しい学風としての実学が18世紀に開花する。この時代の絵画は明・清代の絵画を消化しながら、より鮮明な民族的自我意識を発露したものと言え、一般民衆により近づき、また生活周辺で接することのできる素材を新たに選んだ。この時代の絵画の潮流としては次のことが挙げられよう。

- (1) 中期以来流行していた浙派の画風が衰退し、南宗画が本格的に流行するようになった。

- (2) 南宗画法に基盤を置いて朝鮮に実在する山河を描く真景山水画が台頭した。
- (3) 風俗画が風靡するに至った。
- (4) 西洋画法が伝来し、部分的に受容された。

朝鮮通信使の画員の場合

この期間に朝鮮通信使の来聴は5度に及び、来日した画員、及びその遺品を列挙すると次の様である。

- ⑧ 正徳元年 (1711) 朴東普 「墨蘭図」 (「愛蘭堂書画卷」冒頭)
- ⑨ 享保4年 (1719) 成世輝 「富士山図」 (扇面)
- ⑩ 寛延元年 (1748) 李聖麟 「山水図」 (双幅) 「人物図」 「寿老図」
など約5点
崔 北 「月梅図」 「山水図」 など約3点
- ⑪ 明和元年 (1764) 金有声 「山水花鳥図屏風」 (4図) 「雲竜図」
「芦雁図」 「樹下人物図」 「寿老図」 「墨竹図」 「蘭に蝶図」 など約10点
- ⑫ 文化8年 (1811) 李義養 「樓閣山水図」 「雲竜図」 「柳下駿馬図」
「松虎図」 「春景図」 「対馬島府中図」 「江南雨後図」 など約10点

同代には鄭勲 (1676～1759) が中心となって、金剛山などの真景山水画が流行したが、来日画員もそれを反映してか、成世輝が富士山、金有声が洛山寺に擬した静岡の清見寺の景観、また李義養が対馬・厳原の景観などといった日本の実景に注目してそれを描写した作品が遺されていることが注目される。また、同代に通信使一行が遺した絵画の中には日本人への進物として本国より持参した作品もある。例えば李寅文 (1745～1821)、申潤福 (18世紀後半～19世紀初期)、そして李寿民 (1783～1839) のような比較的有名な画員で、来日経験のない者の作品が見られる。李寅文筆「竹石図」には文化8年 (1811) に通信使の上判事として対馬に来た秦東益、あるいは申潤福筆「故事図」 (四幅) には同じく写字官として来島した皮宗鼎の着賛が各々にある。これらの作品には往々にして、筆者、及び賛者の落款に「朝鮮国」、「朝鮮」、あるいは朝鮮をさす「海東」、「東華」、「小華」などの文字が氏名や雅号の上に付せられている。日本からの、絵画作品にたいする求めの増大や、特定の画家の作品への注文に応じて対処するようになったものと考えられる。やはり本国から持参した有力な画員の作品は絹本着色画という本格的な精作が多いのも、その間の事情を推察すると頷けよう。